

上顎無歯顎に対するNobelGuide(TM)を用いた NobelActive(TM)インプラントによる即時荷重に関する 研究：1年間のプロスペクティブ臨床検査

山田, 潤一

<https://hdl.handle.net/2324/1441153>

出版情報：九州大学, 2013, 博士(歯学), 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開(2)

論文審査の結果の要旨

上顎無歯顎に対する NobelGuide™を用いた NobelActive™インプラントによる即時荷重に関する
研究:1年間のプロスペクティブ臨床検査

近年、上顎無歯顎に対するインプラントの即時荷重による補綴治療について良好な臨床成績が報告され、臨床の場で幅広く適用されるようになった。しかし、上顎無歯顎を対象に、サージカルガイドを用いてワイドスレッドテーパーボディーデザインの陽極酸化処理表面を有する NobelActive インプラントによる即時荷重を行い、その臨床成績を詳細に検討した報告はみられない。そこで本研究では、その臨床的有用性を検討することを目的とし、以下の検討を行った。

上顎無歯顎部にインプラントによる補綴治療を希望して福岡天神インプラントクリニックに来院した患者のうち、選択基準に合致した 50 名(男性 27 名, 女性 23 名, 平均年齢 55.9±8.3 歳)に対し、NobelGuide を用いて 4~6 本の NobelActive インプラントに即時荷重を行い、1年間の臨床成績(生存率, 患者満足度, 埋入トルク, 咬合力, インプラント安定指数(Implant Stability Quotient; ISQ), 辺縁骨レベル(marginal bone level; MBL), インプラント周囲軟組織の状態)を調査した。

50 名の被験者のうち, 48 名(男性 26 名, 女性 22 名, 平均年齢 56.0±8.3 歳, 34~74 歳)に埋入した 278 本のインプラントおよびインプラント上部構造 48 装置について解析を行った。その結果, 埋入後1年経過時点におけるインプラントおよびインプラント上部構造の生存率はそれぞれ, 98.6%, 100.0%であった。インプラント埋入手術時の埋入トルク値は 57.7±16.6Ncm であり, 50Ncm 以上のものが 225 本(77.6%)を占めた。インプラント埋入手術時間は 22.9±4.7 分, 術後疼痛の Visual Analog Scale (VAS) 値は 14.7±9.3 であり, 術後に著明な腫脹がみられた被験者はなく, 腫脹がまったく認められない者が 45 名(93.7%), 口腔内にやや腫脹が認められる者が 3 名(6.3%)であった。また, 口腔関連 Quality of life (QOL)指標の Japanese version of Oral Health Impact Profile については, 術前は 77.0±30.8, 最終補綴装置装着後は 12.9±14.8 であり, 術前と比較して術後に有意な改善が認められた(治療前-暫間補綴装置装着後 P=0.000, 治療前-最終補綴装置装着後 P=0.000, 暫間補綴装置装着後-最終補綴装置装着後 P=0.000, Scheffe の多重比較検定)。ISQ の経時的変化は, 66.02±5.85(埋入時), 64.82±6.31(埋入 2 週後), 66.52±6.49(埋入3か月後), 68.55±6.42(埋入 12 か月後)であった。また, インプラント埋入時からの MBL の変化量は, 12 ヵ月後において-0.32±0.43mm であった。

これらの結果より, 本法は良好な治療成績を示すとともに, 手術時の患者の負担も小さく, 口腔関連 QOL の向上に有効で, かつ即時荷重後の MBL および ISQ の経時的変化等の臨床的指標も良好であったことから, その有効性が示唆された。本研究で得られた知見は, 今後, 上顎無歯顎患者に対するインプラントへの即時荷重を行う治療の可能性を広げ, インプラント補綴治療の発展に寄与するものと考えられ, 博士(歯学)の学位授与に値する。

博士学位論文審査結果の要旨及びその担当者

(ふりがな) 氏名	やまだ じゅんいち 山田 潤一			
論文調査委員	主 査	九州大学	高橋 一郎	教授
	副 査	九州大学	中村 誠司	教授
	副 査	九州大学	牧平 清超	准教授